

常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 4年 6月 24日(金)

その1 通算 247号

◇ ^{さすが}流石の最上級生 クリーン作戦オープニングセレモニーにて

「ひがしっ子クリーン作戦」と題した全校児童による【青木川&ギョギョランド池の清掃】は、何年も続いている本校の伝統的な奉仕的行事である。

そして本年度、緑化美化委員会が主催する本行事が、オープニングセレモニーが加わることで大きく様変わりした。

セレモニーの主体は、**6年生による発信**である。

本年度の本校の研究主軸は、学校の前を流れる青木川の美化活動を主とする環境保全、河川生物との共生の道を考える「河川学習（生活科・総合的な学習の時間等）」である。この学習の動機付けや促進効果をねらいとして7/15(金)実施の「国立三川公園での校外学習」を位置付けていたが、校外学習が霞んでしまうほど6年生による発表・発信は、立派で意味あるものであった。

まずは【構成力】が素晴らしい。発表は4部構成となっており、①青木川の生き物に関すること、②生き物と水のきれいさの関係、③青木川のごみの状況、④水質検査の結果と考察という流れでバトンタッチする形で繋がられていく。これが実にスムーズだ。

さらに発表時の【演出力】が素晴らしい。クイズを交えた展開は、下学年にも興味をもってもらうにはぴったりだ。選択肢も興味深い、正解に驚かされるものもあり、大人でも十分に楽しめる内容だ。

そして、何より素晴らしいのは6年生の【発表力】。発表したい気持ちが伝わるほどの勢いがある。流石だ。



この「学びに対する本物の勢い」・「本物の学習意欲」には理由がある。

6年生は、学年が始まった四月当初から青木川と深い^{さかのぼ}かかわりをもってきた。いや、本当のスタートは2年前に^{さかのぼ}遡る。

4年生の学習（社会科と総合的な学習の時間のクロスカリキュラム的学習）で「ゴミ問題と環境」について追究した子供たちは、親しみ深い「青木川」に着目する。そこで、^{から}ごみ問題を絡めた青木川の実態調査を通し、学校前を流れる青木川が、すでに厳しい状態にあることに気付いていた。

そして、6年生の総合的な学習の時間。学習の対象を「青木川」に絞り込んだことで、2年前に宿った心の灯が一気に膨らみ、大きな炎となったのだろう。

4月下旬に全校で行った「青木川での鮎放流」行事で、閉会したと同時にぐるりと向きを変え、再び青木川に降りて自主的に「ゴミ拾い」を始めた^{うなず}彼らの行動も頷ける。



他にも、水質調査に向かう生き生きとした6年生の姿を何度も見かけたものだ。

自主的・意欲的学びは学校前の青木川にとどまらず、子供たちの視線を外に向かわせる。

向かった先は上流の^{やすどちよう}安戸町。そして水質・生物・ゴミに着目し、学校前の状態と比較して分析し、まとめた結果が発表会の基となる。調査によって得たデータは、発表の大きな意味をもつ根拠となった。だからこそ、発表に説得力を生んだのだ。



パワーポイントのプレゼンまで、すべて6年生が作ったとのこと。^{さすが}流石だ。本物の意欲を^{まと}纏った、まさに、「生きた学び」となっていることを実感する。

発表を聞きながら、前日のとある6年生との会話を思い出す。

『明日は、頼んだぞ』と声を掛けると、『楽しみです』と返ってきた。続いた言葉は、『僕たちの発表を聞いて、みんな（下級生）はやる気になってくれますよ。』

希望ではなく、断言できたのは自信の表れと受け取った。素晴らしきかな6年生。